

序 文

使徒パウロが、私たちに遺してくれた「ローマの信徒への手紙」（以下ローマ書）には、一体何が書いてあるのか……。著者は読者に何を受け取って欲しいのか……。本日から、共に学んで行きたいと思います。

聖書がキリスト教の「経典」であることは広く知られていますが、そこに何が書かれてあるかはあまり知られていません。聖書が扱う究極の問題、それは簡潔に言えば「お前の正しさと清さはどこにあるのか？」「お前はそのまま生き、そのまま死ぬのか？」と、人間が“死”という壁の前で限られた時間のチャンスがある間に、生ける神の前に立たされて問われている自分に気づくか……と言うことです。

この人間の究極の問題に注意が向かなかった人にとって、ローマ書は、神学と宗教思想を学ぶための「書物」に過ぎません。しかし、学問などとは無縁の人でも、一旦この問題に目を開かれる時には、ローマ書は「**私のために書かれた本だ！**」と気づきます。自分の情けなさや醜さ、恐ろしさ……これを何とかしなければならない！主よ、どうか助けて下さい！この最も切実な“私の悲しみ”に光を当てているのが、ローマ書なのです。

16 世紀「宗教改革」の立役者として有名なマルティン・ルター（1483－1546 年）は、ローマ書をドイツ語に翻訳した序文に、「この手紙は新約聖書の主要な書物、最も純真な福音である。すべてのクリスチャンは一言一言知るだけでなく、毎日毎日瞑想の主題、魂の日毎の糧にしなければならない」と書き遺しているのは、それまで目立たなかったその真理を悟ったからにほかなりません。

少し予告をしますと「キリストがして下さったことの意味に気づいてごらん。あなたは、**間違いなく喜びで満たされる**。自分を見ないで、十字架のキリストが誰のために死んだか、復活して生きているキリストが誰のために復活したか、間違いなくはっきり見たら、あなたは清い神の器になる！」。それを分かせようとどこまでも迫ってくるのがローマ書なのです。私たちがどの書簡よりも先に、まずローマ書を読む理由がここにあります。つまりローマ書味読の目的は、神学と宗教思想を学ぶためではなく、それはまことに単純な理由で、これを読むと喜びが与えられるからです。これを読むと嬉しくなるからです。ですから、このローマ書を学びながら、あるいは学び終えた時に、あなたの内側から喜びが溢れていれば、初めてローマ書を正しく理解したことになります。メッセージ集のタイトルを『ローマ書の福音（良い知らせ）』としたのは、そのためでもあります。

自由人キリスト教会／福音伝道者

※現在、当教会では「ローマ書」の連続講解説教を行っています。上記の文章は、メッセージ集の序文ですが、興味を持ちメッセージ原稿の閲覧を希望される方は、メールでお問い合わせ下さい。